



追悼特集

スペインを生きた芸術家、堀越千秋

企画協力:画廊香月 / ギャラリーモリタ

2016年9月
ART FAIR ASIA FUKUOKA
レセプション(福岡/博多座)
©Daisuke Ikeda

Muchas gracias Chiaki

スペイン・マドリードを拠点に活動した画家・堀越千秋さん(1948年11月4日-2016年10月31日)。絵画、エッセイ、陶芸、カンテなどさまざまな芸術分野で活躍され、スペインの生き生きとした風土をそのまま体現したような、奔放かつ力強い生き様で私たちに魅了してくれました。今回、堀越さんと深く交流のあった方々に貴重な追悼文、たくさんの写真をお寄せいただきました。まさにスペインと日本の「架け橋」として生きた堀越さん。その素晴らしい活動の軌跡を、文、写真、経歴や作品を通してお届けします。



画廊香月 / ギャラリーモリタ 25周年記念特別企画 堀越千秋展
2015年6月「アームズの咲ころ」
©Shunichiro Morita

と
か
げ
は
今
日
も
小
鳥
の
真
似
土
の
真
似

香月人美=文
TEXT=HITOMI KAZUKI



1997年「白岳しろ」TV CF スペインロケ
©Shunichiro Morita

「ヒトちゃん、わしの仕事いっぱい創ってくれや、そうしたらみんなに会えるやろ」

末期のがんが堀越千秋のからだを蝕んでいた。

2016年の堀越千秋展は、北海道/帯広、東京、福岡、再び東京と三つの都市で五つの展覧会を開催した。10月の絵本原画展 原作/E・A・ポー 文・絵/堀越千秋『大渦巻き』は生前最後の展覧会となった。作品は鮮やかな青、緑、紫を基調とした色彩のなか鋭い黒い線が紙の上でうねり、冴え渡る月明かりの静けさと極限の彼方で欲望に翻弄される人間の切ない哀しみが同居していた。オープニング前日、「明日、心配せんでええからな、わしの代わりにギタリスト用意したから、いつもみたいに皆に酒振る舞って愉しんでくれや」とマドリッドの自宅から電話をよこした。そしてレセプション当日「そんな約束してないよ、さっきだよヒトちゃんが落ち込んでいるからギター弾いて慰めてこいって、千秋さんらしいよなー」と若林くん。皆、大笑い、それから泣きだした。その日を境に刻一刻と容態が変貌する堀越の報せが届くたびに、ギャラリーは現実の大渦巻きに翻弄され、のみ込まれていった。

堀越千秋との出会いから27年。どんな些細な思いつきも、「へっへっ、おもしろい、それ、やりましょ!」ではじまった二人三脚。画廊香月初個展のこと。街路樹の下で人々が見守るなか5mの看板にうねるような黒い太い線で「志賀島」を描いた。画廊を超え街に飛びだし、カフェ、レストラン、BAL、酒蔵、銀行、エレベーター、病院、個人宅、あらゆる時、あらゆる場所に描いた。ときにカンテを口ずさみ、土を練り、エッセイを書いた。超高級マンションには竹と萱草と二枚の畳で茶室。熊本の高橋酒造「白岳しろ」初CM出演では、アンダルシアロケと義兄弟アグヘタファミリーの棲みかへ。アジア美術館では、ジャズピアニスト板橋文夫、韓国のチェソリとのコラボレーションとライブペインティングがNHKで放送された。後「横浜ジャズプロムナード」に毎年出演。日本最大のロックフェスティバル「フジロック」に招かれアグヘタファミリーのディエゴとミゲルと共にカンテで熱狂させた。福岡に共同で「アフィシオンレコード」を立ち上げ『フラメンコの仙人たち』をリリースした。三菱地所アルティウム福岡で展覧会「He has gone over to Spain」、北海道帯広神田日勝美術館で「西の国から」を開催、さ

らに「ART FAIR ASIA FUKUOKA」のロゴマークを制作、公では最後の登場となるアジア美術館での特別講演「美を見て死ぬ」では私と対談、そしてサブプライズでカンテを絶唱し観客を湧かせた。

堀越千秋とは誰だったのか。あの零れるような笑顔の奥から光の矢を放つような眼差しで、一瞬の内に傍にいる者を魅了する“獣と子供の魂を持つ生きもの”そして、恐るべき“天才芸術家”。

私の最大の理解者だった。今日まで私がギャラリストであるとしたら、堀越千秋の存在なくしてはありえない。私の根底を見抜き、評価し、担ぎ、信頼し、勇気と希望を与え、導いた。出会って間もない頃、堀越はこんな言葉を寄せた。

「かづきひとみとは何か? …するとある日、会う機会が訪れたのである。西武線東伏見駅にて。黒っぽいボロボ布をまとった”もの”が、ぞろり、ぞろりとやって来た。そして「わわわわ」と何か言った。だから、はじめから、“人美”は美人として僕の前に登場したわけではない。それから車に同乗して、温泉かどこかに行ったのだった。車内でかづきひとみは、控えめな女、であった。が、これはただ黙っているだけではないな、と私(探偵だから“私”)は、直感した。いやいや今でも彼女はとても控えめなひとである。クリームソーダに差し込まれたストローのように、控えめである。たまにくる回って、ソーダとアイスをかき混ぜたりする程度。そして音もなく薄緑色のソーダを時折吸う程度。しかるに諸君、ソーダは沸騰し、アイスは爆発し、コップは砕け散るのである WHY??」

銀座の画廊香月の扉に描かれた種子の芽吹きを想わせるような黒く太い躍動する線が私に問いかけてくる。

「いま! ここで!
自分がおもしろいと思うことをやりなはれ!!」と。

と
か
げ
は
今
日
も
小
鳥
の
真
似
土
の
真
似

香月人美 Hitomi Kazuki/朗読者/ギャラリスト/アートディレクター
1958年 福岡市生まれ。1991年 福岡市に〈画廊香月〉開設。ジャズやカンテ・フラメンコと展覧会をクロスさせる等、ライブ感溢れる企画ギャラリーとして注目される。1997年 詩の朗読と舞踏が出会う舞台芸術の世界に踏み出し、舞台作品の制作上演活動に入る。2009年「ギャラリー」は劇場、作品はもの言わぬアクター」というマニフェストを掲げ、東京原宿に〈月下の果実會〉を立ちあげる。2011年 3.11直後の銀座に〈画廊香月〉開設。2016年 ART FAIR ASIA FUKUOKAのExecutive Directorに就任。東京都在住。

堀越千秋先生がおいでなされる天国は、恐らく、
永く住まったスペイン・マドリードの一隅や、
神泉村のような楽しい美境でしょう。御冥福あれ！

平山靖子・平山廉三=文
TEXT=YASUKO HIRAYAMA / RENZO HIRAYAMA

新宿百人町の公務員宿舎で行われた恩師、解剖哲学者の三木成夫先生と桃子夫人の鍋パーティー……そこで我々は堀越さんにご対面。

当時、氏はスペイン国費留学生としてマドリード滞在中。スペインでは、生活費の足しと好奇心から闘牛場での売子バトをやっておられたとか。闘牛場で目にされた猛牛と人との死闘。猛牛の四肢揺り、頭の上げ下げの角振りの仕草。さて、どの方向、どの角度から突進するか？氏は、牛の一挙肢一投足を形態模写で披露された。さてさて、堀越さんの視覚および視覚保存装置はどうなっているんだ？と、一同が唖然。

その後、堀越さんは、神田神保町・丸の内・銀座・四谷・赤坂そして博多などの地で多くの個展を開きましたが、どの会場にも足を運ばれ、吾子の幼少時の画才の非凡とそのエピソードを、目を細めて語るお母上の姿も楽しいものでした。

堀越さんは飾らず伸々と誰にでも細かい心遣いをなさる方でしたが、天皇・皇后両陛下にご覧賜った小島章司フラメンコ舞台。その見事な美術の苦勞・内輪話について皇后様からご質問があったとき……。堀越さんは、慌てふためき直近の方からネクタイを奪い威儀を整えて皇后様の前に立つや。皇后様直々の「堀

越さんならネクタイなしで……」とお言葉に「ヘイヘイ……以後は……」と応答する天真さ。

並はずれの天分と天真さが束となって盛り上がる恒例の神泉村山中の巨大な登り窯炊き……陶芸イベントともなれば、一山は、大戦場の活気と和氣藹々さの極み。その堀越氏が手掛けさえすれば画&陶器&落書き&イベント……全てが大らかさ伸びやかさで優美。

さて、氏の晩年。気楽に、坦々と、ときに^{まなじり}眦を決して、楽しみながら描いていたのがANA「翼の王国」の表紙絵。

あるとき、ボソボソ鼻歌交じりで作業されており、鼻歌は田原坂の一節。「馬手(右手)に血刀、弓手(左手)に手綱……」の口遊みに「へー堀越さんも民謡を歌うんだワイ」と茶々を入れると、「絵描きは、目と手を描く作業に極集中!……そのときのお呪いがメテ・メテ! エッヘッ!」という、相変わらずの悪戯児の目での滅多にないお諭し。

そういえば、氏は中野三中水泳部……何よりも水泳好きの堀越さんが心地よく描き上げた……と自賛の「泳ぐ少年」。多くの孫達に囲まれた老晩年の法皇様の、デレツとした至福を眼と手に込めたティーツアーノと同様、この小僧を見守る水着姿の婆ちゃんの目と手。

力泳する少年の眦。それと同調した両腕。気の遠くなるような水かきと水滴群。これで渾身の泳ぐ少年の図の完成!!

目…眼、そして手。よし河童を描くぜ!!……と渾身の作業を続け……会心の河童の完成だ!!……と喜び勇んで出版社に提出。あろうことか……この真迫さたるや、……不気味すぎて表紙絵には不適……没……との御託宣。

珍しく落胆の極みにある氏を、夫婦二人でアトリエへ電撃訪問のお見舞い。大きな書齋の大机の前の大壁に×を賜った河童……絵はたったの一枚……だけが ポツン と。

多才の氏は、絵画・陶芸の制作、およびカンテ熱唱の合間、週刊朝日に「美を見て死ぬ!」を延々と連載なされた。コダワリが少なく、独特のアクセラカンたる美術評が大々好評。その連載100回記念に、「たった一点だけ自作を」と乞われた氏は、何たることか……この河童を選ばれた。

目力と手力……を深く知り尽くした堀越さんの境地が 河童 であり、人間が具備する卑屈さと猜疑心、そして虚無感などを河童の目と手に託して楽々と描き上げた天才。これが、堀越千秋画伯であろう。



平山靖子 Yasuko Hirayama
平山廉三 Renzo Hirayama
堀越千秋の古くからの友人。共に東京芸術大学教授の三木成夫に師事。画家の初期から晩年までの数多くの作品に親しむ。2013年5月、自邸で堀越千秋展「はるかなる日々」を開催。

©Hitomi Kazuki



「河童遊楽園」
週刊朝日「美を見て死ぬ」vol. 100掲載



「泳ぐ少年」
ANAグループ機内誌「翼の王国」表紙絵



写真タイトル「オフイリアを探して」 ©Hidetoshi Kumagai

追悼、堀越千秋さん。

川成洋=文

TEXT0=YO KAWANARI

実に遠くから聞こえるデカイ笑い声、いつも絶やさな
い笑顔。こんな人と出くわすとい自分もそれにつられて
しまい、自分が抱えている心のわだかまりも寸時にとけて
しまう。そう、堀越千秋さんのことだ。

彼と初めて会ったのは、1991年6月のマドリッドだった。
日本テレビの「スペインで活躍している日本人と会う」と
いう対談番組だった。約束の時間にテレビクルーと一
緒に彼のアトリエに着くが、そこに彼はいなかった。ドアに
鍵がかかっていたので、撮影機材もあるし、ひとま
ずアトリエの中で待つことにした。無造作に壁に掛けら
れていた描きかけの絵を見ながら、われわれは独自の
絵解きと品評をした。とても勝手気ままな絵解きであった。

しばらくして、ドアのところからデカイ笑い声が飛び込
んできた。堀越さんが二階に上がってきたのだ。彼の
遅れた理由が狂っていた。アトリエのオーナーとちょっと
したことでもめたそう。そのオーナーが、なんとカトリック
神父だったのに、愛人を作って「転んだ」のだった。ど
うも「転び神父」のことが気になるようだ。性格が悪い
とか、何とか……、自己紹介を兼ねてこの重大な「宗
教的」な議論がひとしきり続き、「ケンカラン!」という言
葉が時々飛び出したのだった。私もこの種のテーマに
興味があり、その極めつけは、1977年になるが、イギリ

スのケンブリッジ大学にいたころ、『タイムズ』紙の第一
面を堂々と占領した出来事であった。カトリックがいわば
「国教」になっているアイルランドの首都ダブリンの大
司教で枢機卿、つまりアイルランド・カトリック教会の最
高位の聖職者であるが、実は彼は相当前から愛人を
囲って、二人の間の息子が見つかったのだ。このスキャンダルなニュースが数日続き、元大司教一
家はニューヨークに移り、幸い彼はD.Phil.(神学博士号)
を取得していたので、ちゃっかりアメリカで地方の大学
教授に収まったという。だから神父ごときの女狂いにい
ちいち気を揉むべからず。スペインでは、数千件ぐらい
このようなケースがあって、みんな「転ばず」うまくやって
いるそう。それだけではなく、「神父の妻帯を認めろ」
といった運動も起こり、ヴァチカン当局も頭を抱えている
ようだ……。というのが私の結論だった。それにしても、
初対面とはいえ、この話題が一挙にわれわれの距離を
縮めたのだった。

収録が終わり、近くの劇場で行われているフラメンコ・
カンテのライブに直行した。たった一人の老カンテオー
ルのカンテに、これほど多くの聴衆が酔いしれるとは、ま
った驚いたのだった。

堀越さんは、日本とスペインで交互に仕事をしていた。

それも、絵を描き、エッセイ集を出し、陶器を焼き、さらに
都内のタブラオでカンテを歌う。私も、何回か聴きに行っ
た。まさにプロであったし、魂を込めて歌う品のいいエン
ターテイナーであった。カンテをスペイン語、そして場合
によっては日本語でも歌うことがあった。スペインですてに、
CDを何枚かリリースしていた。それに、真偽のほどはと
もかく、この声量でマドリッドのラジオ局のマイクロホン
を壊してしまったという武勇伝(?)の持主だそうである。

私との仕事では、私が編集したスペイン関係書に、
1981年2月のテヘロ中佐の国会乱入によるクーデター
未遂事件、2004年3月のアトーチャ駅でのアルカイダに
よる列車爆破事件などに関して、マドリッド在住の彼な
らではの明快な解説をしてくれた。そして2005年11月、
福岡県での「『ドン・キホーテ』出版四百周年記念パ
ネルディスカッション」で同席したが、途中で突然、司
会者から「カンテを」と促されて、「エー、こちらにおられ
る先生方とインテリジェンスあふれる会話をと思いました
が……(笑い)」と遠慮がちに言いつつも、ステージの
真ん中に立ち、十八番のカンテ「ソレア」を披露した。
その直後、しばしの間、会場全体が水を打ったように
静かになった。

《合掌》

川成洋 Yo Kawanari

1942年札幌で生まれる。北海道大学
文学部卒業。東京都立大学大学院
修士課程修了。社会学博士(一橋大
学)。法政大学名誉教授。スペイン現
代史学会会長、武道家(合気道6段、
杖道3段、居合道4段)。書評家。主要
著書『青春のスペイン戦争』(中公新
書)、『スペイン—未完の現代史』(彩流
社)、『スペイン—歴史の旅』(人間社)、
『ジャック白井と国際旅団—スペイン
内戦を戦った日本人』(中公文庫)他。



川成洋(写真右から2人
目)、坂東省次(acueducto
編集長 3人目)、堀越千秋
(6人目)(2005年11月/
福岡宮地獄神社)

©Yo Kawanari



2015年個展「ママーデミスエントラーニャス(我が母の母)」 ©Hidetoshi Kumagai



©Gonzalo Robledo

二人は、『ドン・キホーテ』という舞台の
ドン・キホーテとサンチョ・パンサで、
運転が麗しのドゥルシネア・デル・トボソ、
という見立てであった。

萩内勝之=文
TEXT=KATSUYUKI OGIUCHI



堀越との出会いは、フラメンコの歌の会だ。1979年、歌手マヌエル・アグヘタの舞台に、二人とも、かぶりついていた。その時のことは、フラメンコ誌「パセオ」で書いた。

以来、途絶えることなく付き合ってきた。まだ、マドリードのブラサ・マヨールが割と安全で夕方のお茶に向いていたころは、日本人の絵描きや物書きが待ち合わせたかのように一緒になって、堀越もその常連で、幾時間も駄弁った。マヨール大路のカフェ・チキでも安いブランドの杯を重ねて居続けた。ローマ法皇庁の出先があるスジオ通りのテラス・カフェでは、決まったようにカバのボトルを空けた。夜明けまで居座るのは当たり前だった。どこにも馴染みのカマレロがいて、座ればお決ま

りの飲み物が来た。地下鉄ラバピエスあたりの広場でカマロン・デ・ライスラの歌を初めて生で聴いたのも堀越と一緒にだった。カマロンが堀越の住む郊外地区アルコロンで歌った時は早朝のタクシーで都心へ帰った。ギター・トマティートがレティロ公園で弾いた時も一緒だった。セビーリャのフラメンコの祭典ビエナルには、ひと月近くもセビーリャにいて会場に通い、カタツムリやイソギンチャクを好んで食い回った。

闘牛場の向こう正面に堀越が居たりして写真に撮ることもあった。マドリードの我が家で喋るときは、塩干しのパカラオ鱈の戻しエスケイシャダを刺身感覚で食べた。ガルバンソ豆と豚の煮物コシードも大量に作った。

25人分作ったこともある。そこにも堀越はいた。二人で美人ギャルをひきつけているときは一桁違う店へ行った。帰りに鍵を失くして堀越のアトリエの床で寝たこともある。

東京・国分寺のほんやらどう、西荻窪のル・マタン、銀座の三州屋も、いつもの店であった。絵を飾らない我が家で、堀越が、美的に許さん、といって家具を五階の窓から捨てようとしたこともある。マドリードで東京から来た美しい女流ギタリストと知り合って二人とも舞い上がった。セビーリャの川では巨大帆船へ自転車式ボートを漕いだ。アンダルシアのロンダでは山中の景色を愛でながら歩いていると、突然、谷底の密林からラバがヌーッと現れた。その時の堀越の反応が忘れられな



マドリードのアトリエ ©Shunichiro Morita

い。ラバは薪を満載し、父と娘らしい二人がひいていた。娘の顔は髭もじゃであった。堀越は、あの娘は自分が女であることに気づいていないかも、と言った。美しい環境にないと美しいものは描けない、という会話をしていた時であった。

ロンダには友人が多く、水洗トイレの壊れた家で三週間、ワイワイガヤガヤ過ごした。深夜、泥酔のまま、四人乗りの車で六人がモロンの洞窟近くのフラメンコ人を訪ねた。マドリードで歌手ラファエル・ロメロと会って日本招聘の話をした時も一緒だった。マドリードの王宮前広場で、深夜、ギターの俵英三も一緒に、フラメンコごっこをしたこともある。

堀越が荻内勝之訳『ドン・キホーテ』の挿絵を描く話が進んでからは、三度、四度とラ・マンチャを訪ねた。普段は砂漠のようなラ・マンチャが豪雨になって、宿の床下の水をかいたこともある。本が出てからは、二人が車でドン・キホーテの道を行くテレビ番組の企画が進んでいた。荻内が喋り、堀越がスケッチ、車の運転がスペインの若い女優という企画であった。二人は、『ドン・キホーテ』という舞台のドン・キホーテとサンチョ・パンサで、運転が麗しのドゥルシネア・デル・トボソ、という見立てであった。

荻内勝之 Katsuyuki Ogiuchi
1943年ハルビン生。神戸市外国語大学イスパニア学科卒、バルセロナ大学文学部イスパニア研究科卒、神戸外大大学院修士課程修了、1970年東京経済大学専任講師、助教授を経て1989年教授。スペイン文学者、東京経済大学名誉教授。東京闘牛の会 TENDIDO TAURO TOKYO 会長。主要著書・翻訳書：『ドン・キホーテの食卓』（新潮社）、『スペイン・ラブソディ』（主婦の友社）、『おっ父たんが行く』（福音館日本文庫）『ドン・キホーテ』全4巻（新潮社）他。

心の底から捧げるオマージュ

セルバンテス文化センター館長
アントニオ・ヒル＝デ・カラスコ＝文
TEXTO=ANTONIO GIL DE CARRASCO

橋本安代＝翻訳
TRADUCCIÓN=YASUYO HASHIMOTO

偉大な画家、フラメンコ・カンテの名手としてだけでなく、人としてもこの上ない人物だった彼に宛ててこの追悼文を書くことが、私にとってどれだけ辛いことか、お察しいただけるかはわからない。

堀越千秋先生に、心の底から捧げるオマージュの一環として、この場をお借りして別れの言葉を簡潔・明解に述べたい。

清廉潔白、優秀、正直、批判的、温和、グルメ、賢明、悲嘆、生命、悲しみ、絶望、闘志、明快、型破り、思いやり、悲観、敏感、開放的、遠慮、活気、夢、フラメンコ、倫理、勇気…… 私が羅列したこれらの言葉を使って、皆様に文を組み立てていただくことで、この偉大な芸術家である堀越千秋先生に私が伝えたいことを垣間見ていただけるだろう。

堀越千秋先生は、あらゆる意味において私が尊敬する人物だった。彼の芸術性は、自身の道徳的資質に内在していた。彼は非常に多様なテーマについて語り、常に私の意見と同じではなかったが、正直で聡明で「優秀な」人物から発せられる言葉には、いつも深く考えさせられたものだった。

千秋、僕の国とはこんなにも文化の違う日本に僕がやって来てから僕が戸惑い続けたこの数年間、きみが明るい声を聞かせ続けてくれたことに感謝している。きみは、僕に起きたすべてのことを常に道理・不条理、正誤など関係なく、よくわかってくれた。

きみという人、それからきみからかけられた言葉の数々に心から感謝している。昨日も今日も僕はきみの言葉がまたすぐ聞こえる気がしている。そして今、明日はもうそれがないと思うと不安感と戸惑いに打ちひしがれる。きみの言葉はいつも、僕に人としての自信と希望をくれた。時が経つとともに僕は、きみという真の道徳的気概の持ち主が僕のそばにはもういないということを実感していくことになるだろう。

千秋、僕は、信仰や生命、死後の世界などから逸脱した次元において、きみのような天才が死ぬことはない信じている。きみの作品、きみの歌、きみの言葉、きみの気持ち、きみの気質は、いつも何らかの形で僕たちの中に生き続けるだろう。

さようなら、千秋。



第1回クンブレフラメンカ
(企画協力/堀越千秋)
でカンテを熱唱

©Instituto Cervantes de Tokio





堀越千秋展 画廊香月(福岡) ©Shunichiro Morita

Antonio Gil de Carrasco アンтониオセルデ=カラスコ
1954年グラナダ生まれ。作家、ジャーナリスト。文学博士。哲文学部卒業。教職課程履修。
セルバンテス文化センター 東京(日本)現館長。

堀越 千秋

Chiaki Horikoshi

1948年東京都文京区生まれ。

画家、エッセイスト、陶芸家、カンタオール(フラメンコの歌手)。

東京芸術大学大学院油画科専攻修了。

1976年スペイン政府給費留学生として渡西後、スペイン・マドリッド在住。

■Art-exhibition (一部抜粋)

- 2017**
- 「赤土色のスペイン」挿絵原画展 (東京/画廊香月)
 - 「Infinity Japan Contemporary Art Show 2017」画廊香月 (台北/Miramar Garden Hotel)
 - 「ART in PARK HOTEL 2017」画廊香月 (東京/パークホテル)
- 2016**
- 「西の国から」企画画廊香月(北海道 帯広/帯広記念美術館)
 - 「西の国から」(東京/画廊香月)
 - 「ART FAIR ASIA FUKUOKA 2016」画廊香月(福岡/アーク福岡)
 - アートフェア アジア フクオカのロゴ制作
 - 講演 特別企画「美を見て死ぬ」(福岡/アジア美術館)
 - 「ART SAPPORO 2016」ギャラリーモリタ(札幌/モリタビル)
 - 絵本原画展「大渦巻」(東京/画廊香月)
 - 「西の国から」(福岡/ギャラリーモリタ)
 - 「ART in PARK HOTEL 2016」画廊香月(東京/パークホテル)
 - 「ART KAOHSIUNG 2016」ギャラリーモリタ(台湾高雄/City Suites Kaohsiung)
- 2015**
- 「ママー・デ・ミス・エントラーニャス 我が隣の母」(東京/スペイン大使館)
 - 「アーモンドの咲くころ」(東京/画廊香月)
 - 画廊香月/ギャラリーモリタ創設25周年記念特別企画「堀越千秋展ーアーモンドの咲くころ」(福岡/ギャラリーモリタ)
 - 「ART FAIR ASIA FUKUOKA 2015」画廊香月(福岡/アーク福岡)
- 2014**
- スペイン国王より、エンコメニエンダ文功功賞受賞
 - 「構になつて浮く」(東京/画廊香月)
 - 「El Chiaki」越の寒中梅 純米大吟醸「新潟銘醸より発売
- 2013**
- BS朝日「情熱の画家 スペインに生きる〜ピカソの魂を訪ねて〜」全国放映
 - 「土の子」陶展(東京/画廊香月)
 - 「水行く途中」(東京/画廊香月)
- 2012**
- 「星の畑」(東京/一巻堂)
 - 読売新聞原画展「水にうつる月」(東京/画廊香月)
 - 第七回 月下の果実會(東京/画廊香月)
 - 「はるかなる日々」(東京/平山邸)
- 2011**
- 堀越千秋スペシャル「みずからみずへ」(東京/画廊香月)
 - 版画展「黙録へ至る」(東京/ギャラリーしらみず美術)
 - 「わが隣のスペイン」(東京/セビリア文化センター)
 - 「全部嘘」(東京/画廊香月)
- 2010**
- ANA機内誌「翼の王国」表紙絵原画展(東京/読売新聞)
 - 「月下事夏の夏 2010」(東京/月下の果実會)
- 2009**
- 松丸百合フラメンコソロ・リサイタル「混沌の朝」舞台美術(東京/銀座座)
 - 陶展「冬の花」(東京/ストライプハウスギャラリー)
 - 小島章司フラメンコ2009「3 Pablos en La Celestina」舞台美術(東京/ル・アートル銀座)
- 2008**
- 「堀越千秋版画展」(大阪/ギャラリー・アカンガス)
 - 「河童の時代」(岡山/Galeria Puntto)
 - 「とがけは今日も、小鳥の真似、土の真似」(東京/月下の果実會)
- 2007**
- 「堀越千秋版画展」(東京/ガラスワゴン/サイドギャラリー)
 - 「河童が来た」(東京/ガラスワゴン/サイドギャラリー)
 - 高野美智子フラメンコ舞踊公演「静しずか」舞台美術(東京/草月ホール)
 - 「祭る〜宮島」アートパフォーマンス(広島/宮島美術館)
 - 「神泉村の国宝たち」(東京/ストライプハウスギャラリー)
- 2006**
- 小島章司フラメンコ「越境者」舞台美術(東京/銀座座)
 - 小島章司フラメンコ2007 舞踏生活50周年記念公演「戦下の詩人たち〜愛と死のはざままで」舞台美術(東京/ル・アートル銀座)
 - 陶展「人を思へば」(東京/ストライプハウスギャラリー)
 - 「堀越千秋展」(東京/画廊香月)
 - 「ドン・キホーテ・デ・千秋」原画展(京都/京都大学)
- 2005**
- 「フィエスタ・デ・千秋」(東京/ギャラリー一巻堂)
 - 「絵画と陶展 躍動の線と色」(東京/一巻堂/ロフト)
- 2004**
- 陶展「秋の土を喰らう」(東京/ストライプハウスギャラリー)
 - 堀越千秋展(東京/ギャラリー・カンゾウ)
 - フジロックフェスティバル出演 共演ディエゴ・アクヘタ、ミゲル・ヒターノ・デ・ブロンセ 企画アフィシオンレコード(新潟/画廊香月)
- 2003**
- 「単純作業」(東京/ギャラリー銀座座美)
 - 画廊香月と共同でアフィシオンレコード設立
 - 初陶器展(東京/ストライプハウス美術館)
 - 「he has gone over to Spain in 1977」企画画廊香月(福岡/三妻地蔵アトリエ)
 - 「フラメンコの仙人たち」aficion展(福岡/画廊香月)
- 2002**
- 「人が見たら嘘に化れ」(東京/ギャラリーしらみず美術)
 - 「らせんのか」(福岡/画廊香月)
 - 「フラメンコの仙人たち」音源・映像収録(スペイン/バルス)
 - 日韓交流ライブペインティング共演 板橋文夫、チエ・ソリライブ 企画画廊香月(福岡/福岡アジア美術館)
- 2001**
- 「踊る色彩」(福岡/画廊香月)
 - ショーウィンドー壁面制作 企画画廊香月(佐賀/佐賀銀行福岡)
- 2000**
- 「見て忘る」森澄雄句 堀越千秋原画展(福岡/画廊香月)
 - 四人展(東京/ギャラリーしらみず美術)
 - 「とんぼのあぶく」企画画廊香月(新潟/川島美術館)
 - 版画展(東京/ギャラリーOM)
 - スペインバルドミンゴ壁面制作 企画画廊香月(熊本/花畑)
- 1999**
- 堀越千秋の世界「鼓動」企画画廊香月(福岡/カンローゼ博多)
 - 百億年の笑い(東京/六本木ストライプ画廊)
 - ふえすたふえすた壁面制作 企画画廊香月(福岡/天神)
- 1998**
- 「スペイン・スケッチブック」(福岡/画廊香月)
 - 「堀越千秋展」(東京/ギャラリー銀座座美)
 - 「堀越千秋展」(大分/みさき画廊)
 - 「油彩・版画展」(東京/ギャラリー412)
 - 「線描の魅力展」(福岡/画廊香月)
- 1997**
- 「堀越千秋展」(東京/画廊香月)
 - IMA 展「絵画の今日展」(東京/三越美術館)
 - 「白岳しる」高橋浩志 TV CF制作スペインロケ 企画画廊香月(スペイン/アダダシア)
- 1996**
- 「堀越千秋展」(宮城/仙台 画廊)
 - 「さし絵原画展」(福岡/画廊香月)
 - 「スペインの夕べ」企画画廊香月(佐賀/豊前市京浜芸術館 SAKEホール)
- 1995**
- カンテ・フラメンコの宵 Hapana Hapa Vol.1 企画画廊香月(福岡/ホテルシーホーク SOTOKOTO CLUB)
 - 「堀越千秋展」(東京/ギャラリー銀座座美)
 - 「天国と地獄の果実」(福岡/画廊香月)
 - IMA 展「絵画の今日展」(東京/三越美術館)
- 1994**
- 「マイトレーヤの散歩」絵本原画展(福岡/画廊香月)
 - 新潟県長岡大花火三人展出品(新潟/川島美術館)
 - スペインシュルレアニローズ(佐賀/セリノアガ大原)
 - 七人の画家達(東京/丸の内画廊)
 - 三人展(長崎/長崎県立芸術文化ホール)
- 1993**
- IMA 展「絵画の今日展」(東京/三越美術館)
- 1992**
- 「堀越千秋展」(大阪/ヨシキョウエィギャラリー)
 - 「堀越千秋展」(東京/丸の内画廊)
- 1991**
- 朝日新聞連載小説・斜影 はるか南国/逢坂剛著挿絵展 三人展(セビリア/カリタ・エニール・D)
- 1990**
- 個展(サラマンカ/ロドリゲスギャラリー)
 - 「スペインの伝統とニューウエーブ展」(東京/丸の内画廊)
- 1989**
- 東京・ソウル・マドリッド Exhibition Show(東京/丸の内画廊/ソウル/韓国画廊) (マドリッド/A.D.M.-ロドリゲス)
 - 「三木成夫追悼展」(東京/ギャラリー)
- 1988**
- グループ展(バーティナ/ロドリゲスギャラリー)
- 1987**
- 「現代形象展」(東京/ストライプハウス美術館)
 - 「1986」
 - 「堀越千秋展」(東京/丸の内画廊)
- 1982**
- 「堀越千秋展」(東京/東京セントラル画廊)
- 1980**
- 「堀越千秋展」(マドリッド/エストレイト・オットメカ)
- 1974**
- 三人展(東京/画廊香月)



「大渦巻き」
原作 / E・ポー 文・絵 堀越千秋 架空社



「画家シリーズ8」
木版画 1994年 画廊香月

「画家シリーズ9」
木版画 1994年 画廊香月



「鉄火フラメンコ」
CD 盤面 2003年
アフィシオンレコード

堀越千秋の 著書 (抜粋)



スペイン七千夜一夜
1999年 集英社



ドン・キホーテ・デ・千秋
2005年 音楽舎



絵に描けないスペイン
2008年 幻戯書房

堀越千秋追悼 第1弾

赤土色のスペイン

挿絵原画展

5 | 20 SAT

↓

6 | 10 SAT

13:00 → 18:30

(初日は17:00からオープニングセレブレーション)

【日・水 休廊】

開催期間

スペイン在住30余年、画家であり、カンテ(フラメンコの唄)の名手である堀越千秋がスペインと日本のフラメンコな日常を辛口のユーモア溢れるエッセイで綴る。

好評だった2つの新聞連載(読売新聞「赤土色のスペイン」／西日本新聞「人の上は空である」)を収録、2008年 致書房刊。カラー88点、モノクロ50点の挿絵原画を一挙公開!!

画廊香月

〒104-0061
東京都中央区銀座1-9-8
奥野ビル605
tel/fax 03-5579-9617
E-mail: luna.kazuki@gmail.com
www.g-kazuki.com

